

スリランカ人日本語学習者に対する感謝表現の指導 法開発に向けた基礎研究

ディヌーシャ, ランブクピティヤ ティランガニー

<https://hdl.handle.net/2324/1500472>

出版情報：九州大学, 2014, 博士（比較社会文化）, 課程博士
バージョン：
権利関係：やむを得ない事由により本文ファイル非公開（3）

氏名	S.M.D.T.ランブクピティヤ				
論文名	スリランカ人日本語学習者に対する感謝表現の指導法開発に向けた基礎研究				
論文調査委員	主査	九州大学	教授	松永	典子
	副査	九州大学	教授	松村	瑞子
	副査	九州大学	准教授	志水	俊広
	副査	九州大学	准教授	李	相穆
	副査	東洋大学	教授	三宅	和子

論文審査の結果の要旨

本研究は、日本語母語話者（以下、JNS）とスリランカ人シンハラ語母語話者（以下、SNS）、そしてスリランカ人日本語学習者（以下、SJFL）の感謝を表す場面（以下、感謝場面）についての理解及び感謝表現の特徴と、スリランカの日本語教育現場（以下、スリランカ）で行われている感謝表現指導の実態を明らかにした上で、SJFLに必要な感謝表現の指導方法を提案するものである。

「感謝」は普遍的な要素であるが、話し手の言語・文化によって、どんな時に、どのように表現するかが異なり（三宅 1994）、JNS と非母語話者間のコミュニケーションに摩擦を起こす原因になる（秦 2002）。一方、「外国人が日本に降り立ったとき真っ先に覚えなければならない基本的語句（三宅 1993）」として感謝表現の重要性も強調されているが、SNS の感謝場面や表現は未だ研究対象になっておらず、その特徴も究明できていない。また、JNS の感謝表現に関して、韓国語母語話者や中国語母語話者等との対照研究は既になされている（秦 2002、安 2005）が、SNS との対照研究はなされていないため、感謝場面で JNS と SNS のコミュニケーションに誤解が起きる具体的な原因は明確にされていない。

感謝表現は、学習者にとって習得が困難である（中村 2006）という認識から、学習の早い段階で指導されてはいる（西 2006）が、学習課題としてどう指導すべきかを具体的に提案する研究はなされていない。スリランカにおいても感謝表現の指導実態、教科書における感謝表現の扱い方、SJFL の感謝場面及び感謝表現の特徴等は明らかにされていない。

そこで、本研究では、スリランカにおける感謝表現指導の実態を調べた結果、感謝場面や表現について十分な指導が行われておらず、文法訳読法中心の指導が行われていること、SJFL の感謝場面についての理解及び感謝表現の使用は、日本語にもシンハラ語にもない中間言語語用論的なものになっていることを指摘している。また、JNS と SNS の感謝場面及び感謝表現の特徴を調べた結果、両話者の感謝場面についての理解に、感謝の受け手と送り手の人間関係、場、感謝に値する行動の当然性等の要素が影響を与えていることを明らかにしている。具体的には、SNS は親しい間柄では感謝を表出すると、互いの関係に距離を感じ、相手の行為の良さが減少するという想いから、感謝の表出を控えたり日本語における「ありがとう」「すみません」に対応するような決まりきった定型表現を使わずに感謝を表わしたりするのに対し、JNS は相手との関係を良好に保つ目的で、頻繁に定型表現で感謝を表すことを明確にしている。また、感謝を表出する多くの場合、JNS は相手の負担、SNS は相手から得た利益に着目して感謝表現を選ぶこと、SNS は仏教の教えである「功德」に言及するというストラテジーを使うことを示している。

以上を踏まえ、JNS と SNS の間に横たわる、こうした感謝場面の理解や感謝表現の選択におけ

る差異を SJFL が体得するには、人間関係、場等の語用論的な内容を強調できる視聴覚教材の活用が有効であることを提起している。さらに、視聴覚教材を活用した感謝表現の習得も含め、SJFL の四技能における総合的能力の育成を目指すには、教師主導による文法訳読法中心の指導ではなく、学習者が主体となって、聞く・話す・書く・発表する等の活動に取り組む活動型の授業を本研究では提案している。

本研究の構成は次のとおりである。第 1 章序論では、研究の背景と意義を述べ、第 2 章では、感謝場面や表現に関わる先行研究を概観し、問題点を提起した上で本研究の目的と課題を示している。第 3 章では、SJFL と SNS 日本語教師を対象にアンケート調査を行い、スリランカで行われている感謝表現指導の実態、第 4 章では、スリランカで開発・使用されている日本語教科書における感謝場面と表現を、日本で出版された教科書と比較分析し、さらに JNS による評価を併せてスリランカの教科書における問題点を探っている。第 5 章では、JNS と SNS の感謝場面についての理解と、感謝表現の選択に見られる傾向を明らかにするインタビュー調査、第 6 章では、JNS と SNS の感謝場面についての理解と感謝表現の特徴をさらに把握する目的で行ったロールプレイ調査及びフォローアップインタビューを取り上げ、その結果と考察を述べている。第 7 章では、SJFL の感謝場面と感謝表現の特徴を明らかにしている。第 8 章では、第 7 章までに得られた知見に基づき、SJFL に必要な感謝表現の指導内容及び指導方法を提案している。最後に、第 9 章では、本研究のまとめと今後の課題を示している。

本研究は以上のように、SNS の感謝場面の理解や感謝表現の特徴について多角的な視点からアプローチし、説得力ある形でシンハラ語の感謝表現研究の端緒を開く研究成果へと結実させている。同時に、SNS の感謝表現の使用実態の解明を通して、日本語の感謝表現の特徴が新たに逆照射されており、日本や欧米とは異なる新たな視点を獲得することに成功している。公開審査では、現場の日本語教育的な動機と興味が社会言語学的な研究に寄与する結果をもたらした例として、また、今後のスリランカの日本語教育に資する研究として高く評価された。